



人間牧場主・年輪塾々長
若松 進一

地方創生と大学生による地域の活性化

このところ「地方創生」という言葉がよく耳にします。耳慣れた言葉ながら、「じゃあ地方創生って何？」と尋ねても、市役所や県庁の行政用語に慣れていると思われる職員ですら、「さあ？」と言葉を濁らせてしまい、明確な説明もできず、「詳しいことはインターネットで見てください。」てな調子で一件落着となってしまう。インターネットに詳しくない私でも、見よう見真似で「地方創生」と書き込んで検索すると、まあ出るは出るはで、どれを読みどれを信じてよいか分からず、結局最後は疑問の館に迷い込んでしまうのです。

「地方創生とは何か」を一言でいうと、「地方経済を活性化させ、若者を中心に地方の人が地元で職を得、豊かで元

気に暮らせるようにしよう。そして人口減少対策もしよう」というもので、国はそのため沢山の予算をつぎ込んでいて、私たちの身近な地方自治体には地方創生を進めるため、「総合戦略」を作ること国から求められています。それは今までのように画一的に予算を配分するのではなく、特徴ある個性的な戦略を立てた地方にのみ予算が配分されるという、いわば生き残りをかけた地方自治体の知恵比べなのです。

地方創生の目指すポイントを要約すると、①人口減少と地域経済の縮小克服（東京一極集中を是正し、若い世代の就労や結婚、子育ての希望実現、地域の特性に即した地域課題の解決）、②まち・ひと・仕事創生と好循環の確立（仕事の創生、人の創生、まちの創生に同時かつ一体的に取り組む）という二つです。

こうしてみると今の日本は、地方創生をやらざるを得ないほど、地方がかつてない厳しい状態に置かれていることを示しています。聞き及べば政府の経済政策によって都市部の経済的な環境は上向いているようですが、その影響はまだまだ地方には届いていないようで、多くの地域では所得の伸び悩みのような経済だ

けでなく、人口減少や高齢化、少子化といった、集落だけでなくまちむらが消えてなくなるといふ深刻な状態になっていて、地方に住む人たちは将来への不安を抱えながら生きています。

さて大学を取り巻く環境についても大きな変化が起きています。大学に入学する十八歳人口の減少は、大学の生き残り競争に拍車をかけていて、四年制の約半数もの大学で入学者の定員割れを起こしていると言われています。このような傾向は地方の大学も例外ではなく、地方の大学は地域との結びつきを深めねば生き残ることができないのです。地方の大学に地域の高校から入学者を増やすことができれば、入学者の数も安定し親の経済的負担も軽くなり、卒業した若者が地域に就職でき、地域にとつても若年人口の流出を止めるばかりでなく、高齢化比率を引き下げる効果もあり、一石三鳥の効果を生むと期待されています。

これまでの大学教育は、どちらかというと就職に有利な学歴を得る手段として価値を見出し、社会に有用な人材を輩出することに重きを置いていませんでした。故に学生も親も都会に出て出世することを望んで必死に頑張ってきました。

日本は今も恐らくこれからも深刻な求人難に陥いると思われ、このままでは会社の存続すら危ぶまれる事態に直面しています。

さてそんな高校や大学の生き残りのための大きな期待もあって、愛媛県内では高校生や大学生が地域づくりに興味を示すようになり、「○○甲子園」とか、大学生によるまちづくりへの参画が、少々過度と思われるほど積極的になっていきます。私の町でもこの数年、伊予農業高校の生徒が先生とともに、まちづくり学校双海人に足繁く参加してくれています。伊予農業高校は職業高校のため普通科のように大学進学を目指すことを目的にはしていませんが、最近是有能と認められれば地元の大学へ進めるメリットもあって、地域の活性化や特産品の開発などに関心も高く、大学に進んでも学生でありながらまちづくりのメンバーとして活動に加わるばかりでなく、わが町のまちづくりを卒論のテーマにするなど、かなり突っ込んだ取り組みをしていて、Iさんという学生もその一人です。

Iさんは高校二年生の時から双海町のまちづくりに深くかかわっていますが、その縁で愛媛大学農学部生物資源学科農

山漁村地域マネジメント特別コースへ進むことができずした。このほど卒業論文「まちづくりによる未来への展望」伊予市双海町の魅力発見に迫る」を書きあげ、二月に大学で行われた卒業論文発表会にはまちづくり学校双海人のメンバーも多数参加しましたが、いい発表をしてくれたようです。ただ惜しむらくはIさんを受け入れるだけの地元の職場がないため、卒業後は別の道へ進まざるを得なかったことを残念に思っています。

また私が実行委員長を務め、毎年十二月に国立大洲青少年の家で行っている地域教育実践交流集会は、この十年間で大学生や高校生の参加が増え、最近では県外広島県尾道市からもバス一台ほどで参加し、分散会や全体会で活発な意見交換ができるようになりました。まだまだ十分とは言えませんが、まさにこれぞ地方創生の始まりです。

大学生は私たちの持ち合わせていない実践パワーと柔軟な思考力、それに様々なデジタル情報ツールを持っています。高齢化の進む地方にとって、これらの若者能力は地域を活性化に足りる魅力的なものなので、大学のない市町でもその気になって取り組めば、大学生と協働

したまちづくりを進めることができるのです。

かつて私たちの町には青年団という若者の組織があつて活発な地域づくりを展開していました。その青年団も今はなく、シーサイド公園やJR下灘駅には大勢の若者が遊び目的でやって来るものの、地域づくりの現場には地元青年の陰すら見えない状態です。でも子ども体験塾への大学生のボランティア参加や、フィールドワーク授業やワークシヨップで沢山の大学生が私たちの町を訪れて勉強するなど、新しい芽吹きも感じられます。地域の活性化のキーワードはひょっとしたら若者かも……。

「十八歳 人口減少 大学は 定員割れで
経営厳しく」
「よく耳に 地方創生 するけれど
役所職員 首をひねって」
「大学は 卒業証書 だけじゃない
社会に役立つ 実学必要」
「危機ゆえに 今がチャンスと 逆手取る
都会目指さず 生まれた町で」
(若松進一の実売談)